

会員の広場



赤石岳の想い出

—大倉喜八郎翁、卒寿(90歳)の誕生日に

赤石岳(標高3120m)に立つ—

田川 修司 (東京)

赤石岳避難小屋にて、淹れたての美味しいコーヒーを飲みながら、そして心に沁みる素敵なおモニカの演奏を聴きながら、青空に映える赤石岳の雄姿を眺めて大倉喜八郎翁の赤石岳の登頂に思いを馳せていました。

大倉喜八郎翁が90歳のお誕生日祝いに行きたいか?と側近に尋ねられた。「誕生日会は、ワシの所有する土地で一番高いところへ登りたい!」と仰ったそうです。感心するのは側近が「殿!ソレ、無理難題仰られては困ります」と断らず、すぐ殿の願望を成功させるためあらゆる手配をし計画を実行に移したことです。その場所は、標高3120m静岡県と長野県にまたがる日本第七位の高峰赤石岳でした。登山道を作る事からはじまり、登山道建設に述べ2000人、道なき道を切り開き、橋を作ったり、山小屋を作ったりしました。90歳の大倉喜八郎を山頂に到達させるために、運ぶ手段は珍しい駕籠での登坂でした。山頂でのお酒のつまみは豆腐を所望。豆腐屋同行等々、並外れた誕生会でした。そして、赤石岳を制覇した大倉喜

(写真: 赤石岳と荒川三山)



八郎翁は山頂で万歳三唱を唱えて大満足であったそうです。総額は4億円も掛かったとか。

大倉喜八郎は、実業家で大倉財閥の設立者です。ホテルオークラ、帝国ホテル、帝国劇場、鹿鳴館、歌舞伎座、大日本麦酒、現日清オイリオ、現ニッピ、日本化学工業、現帝国繊維、現東海バルブ、現大成建設等を設立。大学も作るなど明治期発展に貢献しています。貿易、建設、化学、製鉄、繊維、食品などの企業を数多く興しています。赤石岳の登山口の樺島には、狂歌の名手でもあった大倉喜八郎の『赤石の山のうてなに万歳を唱

ふる老いも有難きの世や』という碑文がありました。大倉翁は、我々の登山と同じ8月の時期の大正15年8月1~7日に赤石岳に登頂しています。今回の登山は、大倉喜八郎翁の名を残す『大倉尾根』を上り南アルプスの核心部である『赤石岳(標高・3120m)~荒川前岳(標高・3068m)~荒川中岳(標高・3084m)~悪沢岳(標高・3141m)~千枚岳(標高・2880m)』の稜線を辿り、大パノラマの山々を眺めたり、雲上お花畑の中の可憐な高山植物の花々を眺めながらの山歩きと豪快で贅沢な南アルプス縦走でした。『山を想えば人恋し、人を想えば山恋し』。赤石岳避難小屋で聞いた「雪山賛歌」「シエナンド河」のハーモニカ演奏のメロデーが今でも耳の奥で響いています。